



大西脳神経外科病院だより 第40号

ぶれいん

発行日：令和2年2月吉日

発行：学術図書委員会

発行責任者：大西 英之

編集責任者：吉野 孝広

大西脳神経外科病院の理念

生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。

神経疾患の専門的・高度医療を実践する。

常に新しい医学の修得に励む。

救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。

地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

世界の流れを見ながら医療を考える

大西脳神経外科病院

理事長 大西 英之



今年が開院20年になります。これまでのことを振り返り更に10年後、20年後の方向性を考える年と言えます。お正月に中国の人生訓書物「菜根譚」を読みました。以前スティーブジョブズ氏が演説の最後に言った「STAY HUNGRY STAY FOOLISH」という言葉を紹介しました。意識すると「いつも何かを求め、愚直に生きる」ということになります。そして「菜根譚」の冒頭にも人生について「愚直に生きる」と書いてあります。策を巡らせ、色々なことをするより愚直に生きているものが最終的に一番強いという事です。「ニーチェの言葉」でも同じような言葉が出てきます。真っすぐに生きる、愚直に生きる。

これを我々病院職員に当てはめて考えてみると、患者さんに対し正直な医療をする、愚直にまじめに医療を実践することがどんな方策よりも強いという事になります。

しかし、世界的には愚直に生きる事を不安にさせる事件が起こっていることも事実です。元日産社長のカルロス・ゴーン氏の国外逃亡や、アメリカがイランの革命防衛隊の車列を空爆しその中にいた司令官を殺害した事件です。報復としてアメリカ大使館が乗っ取られたり、アメリカの将兵が殺されたり、日本の石油タンカーも襲撃にあいました。日本人の正義や平和の考え方では想像できないようなことでも、世界では当たり前のことの様に起こっています。

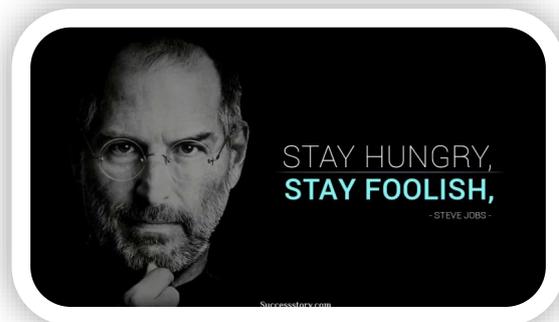
こういう状況の中、私たちはどう考え行動したらよいのでしょうか。やはり原点に戻り、真っ当に、愚直に医療をしていくしかない、それが一番の原点であり、そういう方向で病院も進んでいくこ

とが最も強いのではないかと思います。しかし変化を恐れてはだめです、新しいことに挑戦するということを忘れてはならないと思います。安定することは大切ですが昔のやり方に固執しては進歩ありません。変化していく、新しく挑戦していくことも大切です。

4月には診療報酬改定があり医療経営は益々厳しくなります。国民の医療費が毎年2.5パーセントずつ上昇しています。このまま進めば日本の医療制度は恐らく崩壊するでしょう。

私たちはこのような状況の中、国が定めた医療制度に漫然と従うことが良い事なのでしょうか。我々も医療経済を考え効率的な医療を実践する必要がありますのではないかと思います。

4月からの診療報酬改定もこのような視点で考える必要があります。とは言え真直ぐな医療をする、愚直に正しく医療を続けていく限り大きな過ちはないと思っています。今年も皆さん力を合わせて頑張っていきましょう。



2020年の課題

大西脳神経外科病院 院長 久我 純弘

2019年は年間手術件数が921件と初めて900件を超えることができ、過去最高となりました。全国でも脳神経外科手術件数が最も多い病院の1つと思われます。特に血管内手術件数が284件と増加しました。

一方で医療安全を含めた医療の質を保ち、さらに向上させることが重要な課題です。

昨年4回目の病院機能評価を受審しましたが、まさにこれらの上に重点が置かれた審査でした。すべての医療行為はリスクを伴うものであり、人が行う行為には失敗がつきものであるということを念頭に置いた上で、いかに安全で高度な医療を提供するかを職員一人ひとりが考え、組織としてもシステムを作る必要があります。過去のアクシデントを検討すると決められたルールを守ること、十分なコミュニケーションを図ることで回避できた事例がいくつも見られます。そのためには日頃からそれぞれの部署内、部署を超えた職員相互のコミュニケーションが重要で、それができる打ち解けた職場の雰囲気が必要です。

働き方改革が謳われてますが2020年春の診療報酬改定でもそのことを勘案して、タスクシフト、職務の効率化などが求められてくると思われます。年末に行われた各部署からの院内研究発表では、いくつもの素晴らしい取り組みが報告されていました。まさに、これから必要とされる効率化と医療安全、医療の質の確保という一見相反することへの主体的な取り組みもあり院内システムへと採用、完成できればいいと思います。

当院では脳卒中など救急医療を中心とした診療を行っていますが、高齢化の中で様々なリスクを持った患者さんが多くなっています。その中で安全な医療を提供するためには決められたルールを守ることと職員相互のコミュニケーションが先ず必要です。日常に置き換えてみれば、会議などの時間を守ることも日頃の挨拶が基本です。「ルールとあいさつ」、今年も気持ちよく仕事をしましょう。

「駅前クリニック4年目のスタートに当たって」

大西脳神経外科病院附属明石駅前脳外科クリニック 院長 埜本 勝司

歳月人を待たずといいますが、大西脳神経外科病院附属明石駅前脳外科クリニック(通称大西脳外科クリニック)という長い名前のサテライトが開設して早4年目の新年を迎えました。

去年はラグビーワールドカップが日本で開催され、難関の予選リーグを突破して決勝リーグにコマを進めた我が国の代表チームがOne teamを合い言葉に全力で戦った姿は我々に強烈な印象と感動を与えてくれました。医療はスポーツの様に激しくはありませんが、患者さんとの信頼関係の上に、日進月歩の医学に裏打ちされた知識と経験を駆使して共に病と戦っていく仕事であります。



クリニックと本院がOne teamとして機能し、患者さんの信頼を更に高められるよう努めていきます。

クリニックは明石駅から徒歩1分の、雨でも傘なしで行ける便利な場所にあり、明石の東地区や神戸市の西部在住の方だけでなく、明石市西部や遠くは加古川や姫路からも大久保を通り越して受診される方が少しずつ増えてきました。新患の方はとりあえず診察を受けて、必要であれば本院で詳しく検査してもらおうという方も多くなってきたように感じています。

当院が他のクリニックと違うところは、親病院である江井島の病院と密な連携を持ち、患者さんの情報を含む全ての医療情報を共有して一体となって機能していることです。職員にとっては専用の光ケーブルを通して本院で毎朝行われている症例検討会を聴講することが出来ますし、手術もリアルタイムで見ることが出来ます。クリニックから依頼した患者さんの検査結果も直ぐにわかるため、患者さんの要望に従って本院でもクリニックでも結果説明や治療が出来る体制になっていることは医療サービス上からも理にかなった方法だろうと考えています。

開設2年目から始めました昼休みのミニ講座も去年は9



回行いました。30分という短い時間ですが、毎月第3水曜日の午後の一時、身近な問題を取り上げて話題を提供しています。毎回狭い待合室が一杯になるほど患者さんが熱心に聴講して下さることも有り難く、クリニックの意義を具現出来ているように感じています。

クリニックの表示もJRや山陽電車の明石駅プラットホームからよく見えるように改造しました。本院との連携を益々高め、クリニックと本院がOne teamとして機能し、患者さんの信頼を更に高められるよう努めていきたいと考えています。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。



Male Nurses

頑張る男性看護師さん!



2020年最初のぶれいん特集は 各病棟
男性看護師の方にスポットを当ててみました。

「今までの自分、今後の自分」

脊椎脊髄センター 北2階病棟

木村 尚稀

当院に入職して1年が経ちましたが、初めの頃は日々変化する患者様の状態と病態を結びつける事が難しく、知識・技術ともに未熟さを痛感することが多かったです。また病棟の多忙さに戸惑うことも多くありましたが、先輩方からの指導と励ましを頂き少しずつ乗り越えることが出来ていると感じています。今まではメンバーとして患者様と関わ



る事が多かったですが、数か月前よりリーダー業務を任せられ、医師・多職種との連携調整や、スタッフ全体の動きを把握するという、メンバーの時とは違った目線で患者様の状態を診る難しさを感じています。この1年の学びから今後は、よりスタッフとのコミュニケーションを円滑に回り、また知識を柔軟に引き出す為にも積極的に勉強して経験を増やし、患者様・チームのために万進していきたいと思っています。



重田 真澄 さん

「看護師の役割を再確認して」

脳腫瘍・頭蓋底センター 南4階病棟

戎 高弘



脳神経外科領域は学生の頃の実習の苦い思い出からは苦手意識がありました。しかし、他の領域の看護を提供していく中で、脳神経外科領域の知識が必要であることを痛感し当病院へ就職しました。気が付けば入職し6年が経っていました。病棟だけでなく、手術室や救急外来も経験し、緊急入院した時の患者さんや家族の不安へのアプローチや腫瘍だと告知された患者さんへの不安へのアプローチといった事を勉強していく中で、看護師の役割を再確認し力不足ですが日々実践しています。これからも周りの助けを得ながらですが、患者さんにより良い医療や看護が提供できるように邁進したいと思います。



柴野 嘉之 さん

藤原 和平 さん

「大切にしていること」

脳卒中センター 南3階病棟 **山村 尚親**

大西脳神経外科病院に入職しもうすぐ2年になります。病棟経験のなかった私は入職当初、毎日が戸惑いと発見の繰り返しでした。南3階病棟を経験した後、希望していたSCUに配属され約1年、ようやく自分の看護と向き合える余裕ができて始めてきたように思います。

その中で私が日々大切にしていることは、患者や家族に寄り添った看護ができるということです。脳卒中によって今までできていたことが突然できなく



山村 尚親 さん



出口 英典 さん

有延 道人 さん



栗田 健二 さん

尾崎 大地 さん

なったり、入院という環境の変化に対する受け止め方は患者によって様々です。中には混乱された状態で入院される方もいる為、その感情の変化を早く捉え、安心して、最善の治療を受けていただけるよう援助することを大切に考えています。そして、患者様だけでなく、その家族に対しても誠意のある対応ができるよう日々心掛けています。患者や家族に信頼される関わりができるようこれからも努力していきたいと思っています。

「2020年度のコトワザは初心を忘れずに」

回復期リハビリテーションセンター 北3階病棟 **平井 淳**

私は昨年、新人教育を担当しました。出された課題に一生懸命取り組む姿をみて、自分ももっと学習意欲を持つことを改心させられました。2020年度は、初心に戻って自分のためのスキルアップに頑張りたいと思います。後輩育成は継続し、回復期のやりがいやおもしろさを見出し



てもらえるように、私自身もがんばりたいと思います。

今年で回復期病棟が開設して丸3年が経ちます。段々と病棟の色も出てきたと思います。男性看護師が一人しかいないので心細い面はありますが、病棟の色を今よりももっと明るい色にできるよう頑張っていきたいと思っています。

プライベートでは2人の子供と遊んでばかりの生活です。そのため妻のことはほったらかしになりがちです。なので、家庭でも初心に戻って妻へのサービスを今年度は頑張っていこうと思います。



誰にも負けない強み

手術室 副主任 **松原 昌城**



手術室では男性看護師が3名在籍しており、毎日様々な脳神経外科手術を担当しています。

手術室看護師は他の病棟の看護師とは違った、特殊な知識と技術が必要です。そのため、積極的に研修に参加して知識や技術を習得する事を心掛けています。私は男性看護師として働く上で、誰にも負けない強みが欲しいと思い、約5年前に【手術看護認定看護師】という資格を取得しました。今はこの資格を活かして、現場の看護師への教育活動にも力を入れています。



三好 祐貴 さん



橋本 昭太 さん

当院の脳神経外科の手術件数は全国でもトップクラスを誇り、さらに最新の手術機器を導入しており、当院の手術室だからこそ学べる医療・看護が多くあります。

手術室は病院で働く医療従事者もあまり中に入ることがない場所ですが、是非手術室の医療・看護を見学に来てください。

第19回 院内研究発表会

2019年12月21日、毎年恒例の院内研究発表会が行われました。今回で19回目となり各部門ともレベルの高い研究発表となり、久我院長からは「各部門での取り組みや研究が実際に業務の効率化や成績に直結する発表となっており非常にレベルの高い研究発表会であった」と好評をいただきました。

そして今年の理事長賞に輝いたのは、臨床検査室の池田紘二氏ほかの発表でした。審査員満場一致の理事長賞であり3年を掛けて得られたデータを分析した内容は日々の地道な努力がうかがえます。

それでは池田氏の研究を紹介しましょう。



池田さん熱弁中！



(次のページ)

授賞式での記念写真

下肢導出を目的とした経頭蓋MEP刺激 ～200症例を通しての見解～



臨床検査/臨床工学室

池田 紘二
細江 将之、柏原 博子、妻木 みず紀
山本 慎司、松岡 龍太

【目的】

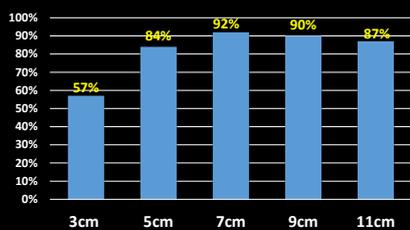
- ① 下肢MEPの導出不良要因の検討
- ② 至適刺激位置、刺激条件の検討



【結果】

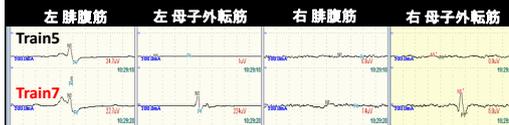
下肢MEPの導出率：200症例中、179症例（89％）で導出できた。導出できなかった症例を検討すると男女差があったため、骨密度との関連を調べた結果、下肢MEPの導出と骨密度に関連性が示唆された。（骨密度が高いほどMEP導出が困難）至適刺激位置は、頭頂から側方に7cm/前方に2cmの場所が最適だった。通常5Trainの刺激を用いるが下肢MEPを導出できなかった症例には、7Trainで刺激することで下肢MEPを導出することができた症例も経験した。

各刺激点での導出割合



刺激条件の検討

下肢MEPが導出できなかった6症例に対して、Train7を試みた



6例中、5例で下肢MEPを導出できた

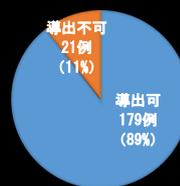
3年かけて研究を続けられたことで分かったことや、今新たに分かったこともあるため、今後もこの研究を継続していきたいと思っている。研究にご協力いただいた、術者、麻酔科医、手術室看護師、リハビリスタッフ、検査室スタッフに改めて心より感謝いたします。

【背景】

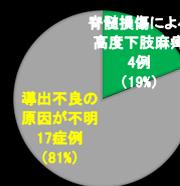
脳・脊髄手術の術後に手足の麻痺が起こらないように、手術中に術中モニタリング（MEP）を行っている。下肢MEPの方法がまだ確立されていないため、2016年から研究を開始した。2019年に200症例分のデータが得られたため研究をまとめた。

結果

下肢MEP導出率
(全200症例)



導出不良症例の内訳
(21症例)

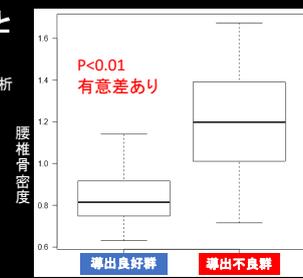


下肢MEPの導出と骨密度の関係

多変量ロジスティック回帰分析
(年齢、性別)

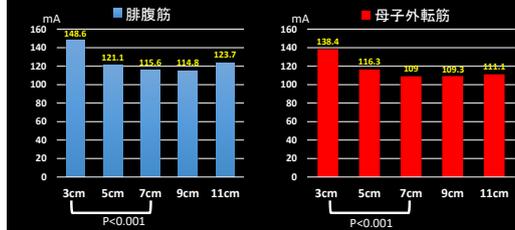
大腿骨密度も同様の結果
 $P < 0.05$

MEPの導出と骨密度に関連性あり



至適刺激位置

Mann-Whitney U検定



【研究発表を終えて】

以前、大西理事長から「研究の題材は、仕事の中で疑問に思ったことや、日々の業務の改善を発表したらいい」と教えていただいたので、普段から疑問に思っていた題材（下肢MEPがしやすい人と、出にくい人の差は何だろう？）を研究することとなった。

結語

下肢MEPの導出不良には、頭蓋骨の性状(骨密度)が関係していることが示唆された。

下肢MEPの至適刺激位置は、Czより側方に7cm(前方に2cm)が適している。9cmでも同程度の導出が可能である。

Train7を用いることで、導出率が向上する可能性がある。

感染しない体「免疫力」



免疫は、身体の特定の臓器ではないので、目や心臓のように悪くなったことがわかるものではありません。普段はその大切さがわかりにくいと思いますが、生命維持になくってはならないものなのです。“免疫の力”が高ければ、様々な病気から体を守ってくれます。

冬は特に空気が乾燥し風邪などひきやすくなっていますが「症状が軽ければさほど心配することはありませんが、高熱で寝込むような風邪に、年に3度以上かかっている人は、それだけ免疫力が低いということなので注意が必要です」と、免疫学の第一人者である順天堂大学医学部の奥村 康先生は言われています。

免疫力は20代をピークに年々衰えていき、40代になるとピークの約半分まで低下すると報告されています。現代では3人に一人が罹患すると言われている癌も、風邪にかかりにくい人は癌にかかる確率が低いという報告もあります。では一体どうやって免疫力を高めればよいのでしょうか。

免疫システムの主役であるリンパ球には、T細胞やB細胞、NK（ナチュラルキラー）細胞といった免疫細胞があります。T細胞とB細胞の力の強さは一生を通して変わらないのですが、NK細胞はその人の状態によって大きく変化します。これを活性化することが免疫力を上げることに繋がります。

最近では健康に対する意識が高く運動や食事に気を遣う方も多いようですが良いと思っても免疫力を高めるには逆効果なこともあるようです

① コレステロール値が低いと免疫力は下がる。コレステロールはさまざまなホルモンを作る材料なので不足すると、神経系と免疫系に悪影響を及ぼし、結果NK細胞の力を弱めてしまいます。常にコレステロールは悪の様に言われますが不必要に下げすぎるのは良くないようです。

② 肉が含むたんぱく質でNK細胞は作られる。確かに野菜は体に良いものですが、ダイエットでお肉を取らないのは最も良くないようです。

③ 激しい運動の直後には免疫力が低下する。健康のためにいくつもの運動を行っていたり、苦しくても頑張る過剰な運動をしたりしていませんか？実は過剰な運動の後は免疫力が下がる事が解っています。無理な運動は控えて適度なジョギング程度が良いとのこと。

④ 腸の健康は免疫力アップの特効薬

NK細胞をはじめ、免疫細胞の約70%が存在しているのが腸。腸が健康でなければ、NK細胞の活性化は望めません。暴飲暴食によって腸の働きが悪くならないよう規則正しい生活と食事摂取が大切であるという事です。お酒は適度であればよいようです。

⑤ やっぱり睡眠不足は良くないですね

NK細胞の活動は夜に低くなり昼に高くなります。不規則な生活で夜更かしをするとこのリズムが崩れ免疫力上がりにくくなります。やはり夜はしっかりと寝て体を休めることが大切です。

免疫力は

1. 食事や睡眠など普段の生活習慣
2. 心理状態
3. 喫煙
4. 適度な飲酒
5. 適度な運動
6. 笑う
7. 体温を下げない



編集後記



今年の12月で当院が開設して20年となります。「ぶれいん」も開設以来発行しようやく40号を発刊することが出来ました。思えば開院当初病院の新聞を作らないかと大西理事長から話を頂き、軽い気持ちで引受けたのを思い出します。1年に4回程度の発行を、と計画しても遅々

として進まない編集、40号なので年2回程度の計算です。しかし大西脳神経外科病院の歩みを違う形で残している「ぶれいん」には強い愛着と自負のようなものがあります。原稿依頼など皆様にはご協力頂くことも多いかと思いますが、今後ともぶれいんを引き立てていただきませうお願いします。(吉野)

